

分析哲学のいわゆる「心理学的起源」について

伊藤遼(慶應義塾大学)

いわゆる分析哲学の一つの端緒が、1900年前後にムーア(G. E. Moore, 1873-1958)とラッセル(Bertrand Russell, 1872-1970)が提示した、ある種の多元論的实在論に求められることはよく知られている。彼らがこうした实在論を提示した背景に、彼らがかつて受け入れていた英国観念論を退けようという目的があったこともよく知られている。

しかし、近年、初期分析哲学史(early analytic philosophy)を専門とする研究者たちのあいだには、分析哲学の起源に関する、こうした単純な見解、すなわち、ムーアやラッセルは、当時英国で隆盛をみた一元論的観念論と対峙する中で、それに対するオルタナティブとして、多元論的实在論を提示したという見解を疑問視する動きがみられる。そして、そうした研究者の注目を集めているのは、ムーアやラッセルが学部時代に師事した心理学者・哲学者であるスタウト(G. F. Stout, 1860-1944)である。

スタウトは当時 *Analytic Psychology* (1896) や *Manual of Psychology* (1898-1899) の著作で知られていた。とくに前者は、ブレンターノ(Franz Brentano, 1838-1917)の「記述心理学」(deskriptive Psychologie)を発展させ、それを科学の一分野である経験的心理学に対する「予備的考察」として提示する著作であった。スタウトは、1884年から1896年のあいだ、ケンブリッジにおいてフェローとして在籍した後、アバディーン、オックスフォードにおける職を経て、約30年間、セントアンドルーズにおいて教鞭をとった。彼は、1899年から5年間 Aristotelian Society の President を務めただけでなく、30年近くの間、学術雑誌 *Mind* の編集責任者であった。このように、スタウトが当時の英国の哲学者たちのあいだで中心的な役割の一つを担ったことを踏まえれば、近年みられる、彼が他の哲学者たちに与えた影響を見積る試みは重要であると言える。

こうした試みの中でも、本発表の主題ととりわけ深く関わるものは、Preti(2008)と van der Schaar (2013, 2016) である。1900年前後に、ムーアやラッセルが支持した多元論的实在論の端緒は、ムーアの1898年のフェローシップ申請論文にある。この論文の中心部分、すなわち、彼のカントの判断論批判とその批判の根拠となる多元論的实在論は、雑誌論文「判断の本性」(“The Nature of Judgment,” 1899)として公表された。この「判断の本性」こそが、ムーアやラッセルの多元論的实在論を最初に世に知らしめるものであった。Preti (2008) は、「判断の本性」がまとめられる過程や、当時ムーアが記録していた講義ノートなどを事細かに調べることで、彼にスタウトが与えた影響を明らかにしようと試みる。一方、van der Schaar (2016) は、ムーアが「判断の本性」において提示する判断論と、ブレンターノやトヴァルドフスキ(Kazimierz Twardowski, 1866-1938)の判断論との共通点、とりわけ、両者が判断の行為と対象とを区別する点を指摘した上で、前者がスタウトを通じて後者の「影響」を受けたと論じる。

こうした Preti や van der Schaar の取り組みは、英国における分析哲学の起源に対する20世紀後半に前提されていたような単純な見方を覆すものとして有意義なものである。とはいえ、こうした取り組みの成果を無批判的に受け入れることは必ずしも建設的ではない。まずもって、「判断の本性」において、ムーアは、自らの多元的实在論が他の哲学者に負うものだと認めてはいな

い。彼が自らの立場の由来を隠匿したのであれば、彼はそれをオリジナルな主張として理解していたはずである。加えて、Preti や van der Schaar は、彼にスタウトが与えた「影響」を説くなかで、そもそも「影響」という語の内実は無頓着である。哲学史において、ある哲学者が他の哲学者に与える「影響」には様々なあり方が考えられる。どのような種類の「影響」を念頭に置くのかを明らかにすることなくスタウトとムーアのあいだの「影響」関係を論じることはおそらく建設的ではない。

こうした点を踏まえて、本発表では、まずはスタウトとムーアの間可能な「影響」関係を整理した上で、両者のあいだの関係を正しく見積る一つの試みとして、後者の实在論的判断論を特徴づける二つの考えの起源を明らかにする。ムーアが「判断の本性」において提示する多元論的实在論、すなわち、世界はわれわれの心的作用から独立した存在者である諸概念から構成されるという考えは、思考可能な対象はなんでも存在するという主張、そして、われわれが諸概念について思考可能であるという主張、この二つの主張から直接導かれる。前者の主張については、van der Schaar (2016) が指摘するように、スタウトの著作においても同様の考えがみつけられる。彼は、「われわれがどのような方法でも知覚したり考えたりし得るものは何であれ、われわれがそれを認識する諸過程からは独立した存在と本性を持つ」と述べる(Stout, 1900)。しかし、この記述の存在のみを持って、van der Schaar のように結論することはできない。当のスタウトの主張は、ムーアのそれとは相異なる文脈、目的でなされたものであり、二つの主張が同じ内実を伴うものではないという可能性があるからである。加えて、後者の主張、すなわち、概念そのものについての思考可能性については、Preti や van der Schaar は全く論じていない。本発表は、ムーアの多元論的实在論を特徴づけるこれら二つの主張がどのように成立したのかを明らかにすることで、Preti や van der Schaar が説く、スタウトがムーアに与えた「影響」なるもの、分析哲学のいわゆる「心理学的起源」という考えについて批判的な検討を加える試みである。

文献

- Moore, G. E. (1899) “The Nature of Judgment,” *Mind*, 8, 176-193.
- Preti, Consuelo. (2008) “On the Origin of the Contemporary Notion of Propositional Content: Anti-psychologism in Nineteenth-century psychology and G. E. Moore’s Early Theory of Judgment,” *Studies in History and Philosophy of Science*, 39, 176-185.
- van der Schaar, Maria. (2013) *G. F. Stout and the Psychological Origin of Analytic Philosophy*, Basingstoke: Palgrave MacMillan.
- van der Schaar, Maria. (2016). “Brentano, Twardowski, and Stout: From Psychology to Ontology,” *Oxford Handbooks Online*. [http://www.oxfordhandbooks.com/view/10.1093/oxfordhb/9780199935314.001.0001/oxfordhb-9780199935314-e-67.]
- Stout, G. F. (1900) “The Common-sense Conception of a Material Thing,” *Proceedings of Aristotelian Society*, 1 (n.s.), 1-17.